

恐山参拝者宗教調査

小林 栄

はしがき

- 一、宗教調査項目について
- 二、参拝者の総括的資料
- 三、参拝者の目的
- 四、参拝者とイタコ
- 五、参拝者の宗教
むすび

はしがき

本稿の基礎的資料は、昭和四四年七月二〇日から二二日にかけておこなった、恐山における参拝者との個人的イン

恐山参拝者宗教調査 (小林)

四三

ターヴェーである。たまたまその期間は、大学紛争がなおも激しい余熱をもっており、学院としては、封鎖解除、授業再開と正常化への努力をつづけていたが、全共闘による授業妨害がつづき、神学部においても、神闘委とその共鳴者による授業妨害や各種のいやがらせが、あとを断たぬ頃であった。いつもならば夏期休暇に入っていた七月も、連日暑い教室で講義がつづけられた。土曜日は改革推進日ということで、学院改革のための活発な討論の場とされたが、神学部においては、それは神闘委に対して、教授会攻撃の絶好の時と場所を提供する結果となった。事実、われわれのこの調査旅行も、彼らの批判攻撃の好餌とされ、自己批判を迫られたのであった。

この宗教調査は、当時大学院の一年度生として、筆者が担当していたキリスト教々化学特殊講義（日本宗教史）を受講していた三名（花谷衛、大村清、向井考史）の学生諸君と共にあった共同調査の結果を整理したものである。恐山はここ数年来一種のブームをおこしたが、われわれ調査団がおこなったような、参拝者を個人的にとらえて、参拝の目的その他の宗教調査を試みたものは、今までに発表されていない。昭和三八年から三九年にかけておこなわれた、九学会連合下北調査委員会の宗教部門調査団による、恐山参拝者調査があるが、これは参拝集団を対象としたものであるし、⁽¹⁾六、七年前の資料でもあるので、われわれの調査報告は、未熟ではあるが、一つの新しい資料としての意味はある。

今ここに資料を再び整理して、発表にふさわしいものとしてみたが、時を経過すればそれだけ、反省や批判が多くなって、欠陥が目立ってくる。しかし、あの異常な学院の雰囲気の中にあつたわれわれが、なした精一杯の努力ではなかつたか、と自ら慰めているものである。多くの取材用の機械をのせて、関西の地から遠くみちのくの北端、下北半島までの車での旅行は、われわれ四人の間に、教室では与えられない人間関係の新しい面を与えてくれたのも

大きな収穫であった。その後このグループは、白川郷での報恩講研究、さらに本年に入って出雲大社における出雲教
 お乃美大教院の「お国帰り」をも共同調査することができたが、なんとと言っても、この恐山調査はわれわれの心の中
 に、いつまでも忘れえぬ思い出となる。本稿は発表の形式上、筆者の名前をつけてはいるが、実質的には、われわ
 れ四名の共同研究とも言うべきであろう。この研究成果が印刷出版される頃には、三名の学生諸君は、それぞれの任
 地に出発していると思う。悪夢の如き学院紛争の中で、苦楽を共にして生まれたこの調査報告を、数々の思い出を胸
 にしつつ、ここに発表するものである。

一 宗教調査項目について

この宗教調査の意図は「恐山をおとずれる人々が、どのような目的をもって、はるばると本州最北端の交通不便な
 地まで、やってくるのであろうか」を知ることには始まって、恐山とは切っても切れぬ間柄となった、イタコに対する
 参拝者の態度、更にイタコの仏オロシに対しての彼らの反応の分析や、参拝者の地理的分布や宗教的関心度なども
 出来る限り捕えようとしたものであった。

酷暑の恐山の本殿地蔵堂前、宿坊前、四十八塔前、あるいは無間地獄や塞の河原に立って、花谷、大村、向井の諸
 君が、ランダム・サンプリングによつて、直接インタビューをした。始めに調査の主旨を個別に話して、協力を依頼
 し、応じてくれた人に対して、やや詳細にわたり過ぎると思える、後述のごとき調査をおこなった。三名によつて
 面接しえた人々は、一七八名に達した。調査を始めるのに先立って、年令、性別などで、あまり傾よつたものになら

ぬように注意しておいたので、参拝者の中から比較的妥当な調査結果をえたものと思う。

調査項目を、調査終了後に一同で検討してみると、類似した項目もあって、重複していると思われる点もあるが、又微妙な点での表現の違いもあって、それなりに意味もあると考えるので、変更を加えないでおいた。いまここに、調査項目を、読者に便宜上、一部の順序を変えて挙げてみると、次のようになる。

恐山参拝者宗教調査 昭四四・七・二〇

一、性別。 二、年令。 三、職業。 四、都道府県。 五、市町村。

六、参拝単位。

a、旅行社の団体バスで。 b、部落の講組織で。 c、友人たちと。 d、近所の人々と。
e、研究グループと。 f、家族たちと。 g、個人で。 h、その他。

七、参拝の目的。

a、夏の大祭にお詣りするため。
b、死者供養のため。
c、イタコに仏をおろしてもらうため。
d、観光のため。
e、旅行の一訪問地として。
f、キャンプのため。

g、何か面白いときいたので。
h、その他。

八、恐山で何をしましたか、又しようと思っ
ていますか。

a、塔婆を立てる。
b、読経してもらう。
c、供養にお菓子、わらじなどを
供える。
d、イタコに仏をおろして
もらう。
e、イタコがどんなものか
見たい。
f、観光見物をする。
g、温泉に入る。
h、その他。

九、滞在期間。

a、日帰り。
b、宿坊に宿泊。
c、境内に宿泊。

一〇、イタコの口寄せについて。

a、すでに口寄せをすませた。

恐山参拝者宗教調査 (小林)

b、これからたのむつもりである。
c、たのまない(なかった)。

一一、口寄せをたのまなかった理由。

a、信じてないから。

b、興味がないから。

c、馬鹿馬鹿しいから。

d、迷信だと思うから。

e、時間がなかったから。

f、死者の命日を知らなかったから。

g、何となく気おくれがしたから。

h、その他。

一二、誰をおろしてもらいました(ます)か。

a、祖父 b、祖母

c、父 d、母

e、兄弟、姉妹 f、子供

g、夫 h、妻

i、親戚 j、友人、知人

k、その他。

一三、何人位仏をおろしてもらいましたか。

a、一人 b、二人

c、三人以上

一四、イタコは何人位たのみましたか。

a、一人 b、二人

c、三人以上

一五、イタコの言葉について。

a、よくわかった。

b、大体わかった。

c、少ししか、ききとれなかった。

d、ほとんど、わからなかった。

e、全くわからなかった。

f、その他。

一六、口寄せの内容について。

a、死者とぴったり一致した。

b、ところどころ一致した。

恐山参拝者宗教調査（小林）

- c、多分自分のたのんだ仏であろうと思った。
- d、はっきりとは言えない。
- e、おかしいと思う(余り信用できない)。
- f、その他。

一七、以前イタコに仏をおしてもらったことがある人に対して。

- a、予言はあたったと思う。
- b、少しあたったと思う。
- c、全然あたらなかった。
- d、予言のことなど、間もなく忘れてしまったので、何ともいえない。
- e、その他。

一八、イタコとの接触。

- a、今までに○回位あっている。
- b、その場所は。
- c、こんど始めてイタコにあった。
- b、イタコのごとはニュースや本などでできたことがあるか、どうか。

一九、家庭の宗教(宗派)。

二〇、個人の宗教。

a、特になし。

b、宗教に興味をもたない。

c、家の宗教をそのまま受け容れている。

d、私個人の宗教は〇〇である。

二二、聖書について。

a、よんだことはある。

b、よんだことはない。

二三、キリスト教との接触。

a、集会に出たことはある。

b、集会に出たことはない。

c、集会の種類。

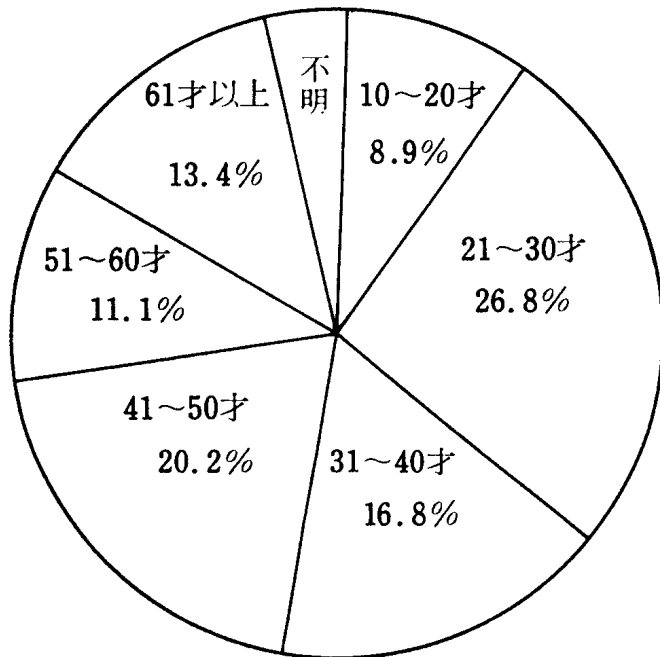
d、キリスト教ラジオ放送。

e、キリスト教テレビ放送。

以上の調査項目を内容的に区別するならば、第一項から第九項までは、一般的、総括的なもので、第一〇項から第一八項までは、イタコに関する質問事項である。第一九、二〇項では家庭の宗教（宗派）と、本人の宗教に対する関心をしらべてみた。最後に、つけ足しのようなものであるが第二一項と第二二項で、参拝者の聖書とキリスト教にたいする接触の程度を調査してみた。三名の調査担当者にとっては、このような面接は始めての経験であったと思われるが、

恐山参拝者宗教調査（小林）

第2項 年令別による恐山参拝者



第1表

まず、われわれの調査対象となった一七八名を、性別、年令別に百分比で示すと、男子と女子では、男子四〇・四％（七二名）に比べて、女子は五九・五％（一〇六名）となり、大体四分六分で、女子の参拝者の方が、やや多かった。次に男女を分けずに、年令別のみによって、参拝者を分析してみると上の第一表のようになる。二一才から三〇才までの青年が二六・八％を占めているのは、恐山の大会祭が、夏休みに入っている学生にとって興味の対象となった点が考えられる。三一才から四〇才までは、一六・八％に低下するが、四一才から五〇才になって再び二〇・二％と上昇している。これは、ようやく一家の責任をまかされた夫婦が、自覚的に死者供養などを営なもうとした点が反映されているのであろう。五一才から六〇才にかけては、再び一一・一％と下向するが、六一才以上については、一三・四％と上向きとなる。より切実に死を目前にした年令の者たちの、死に備えて

以下に記述するように、まづ満足すべき成果をあげたものと思う。

二 参拝者の総括的資料

の恐山参拝でもあらうと思われる。

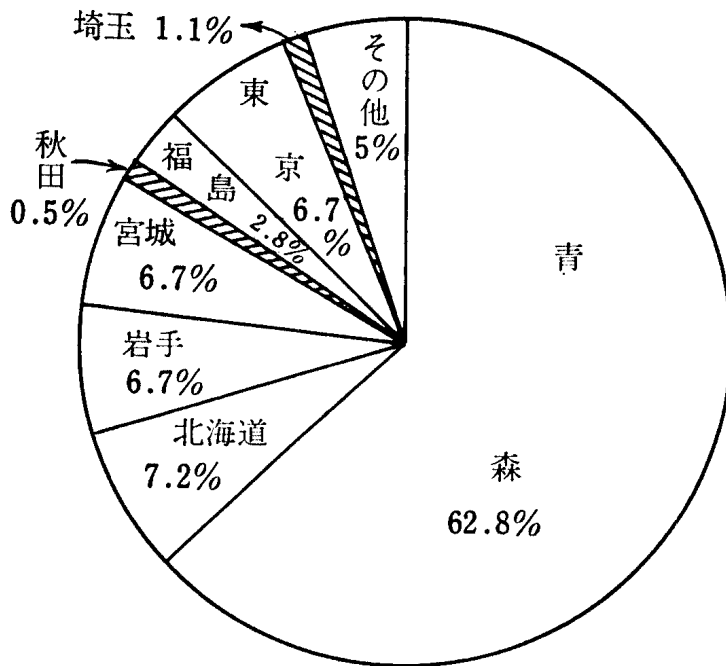
いま対象者について、性別、年齢別の両面を同時に考察してみると、一番多いのは二一才から二五才までの女性で全体の一二・九%、ついで二〇才までの女性と、四一才から四五才までの女性のそれぞれ六・七%となっている。二一才から二五才までの女性が非常に多いのは、調査担当者の個人的な関心もあつたであろうが、客観的にみても、多かつたのは事実である。その他に気づく点は、三六才から四〇才の男女を比べた時、男子四名にたいして、女子は一名と、ほぼ三倍に近い事実である。これら、年齢の女性が、どんな目的で参拝しているのかをみることも、興味ある点であらう。

つぎに下の第二表によつて、調査をおこなつた一七八名の現住所の地理的分布をみよう。何といつても、地元である青森県在住者が六二・八%（一一二名）と圧倒的多数を占める。次に北海道の人々が大きくはなれているが、七・二%（一三名）とつづく。岩手、宮城が同率でつづいているが、興味のある事実は、東北地方でも、日本海側の秋田は〇・五%（一名）とずっと少なく、山形に至つては、われわれの対象者の中にはいなかった。

東京からの人々が六・七%（一二名）いたことは、恐山が

恐山参拝者宗教調査（小林）

第4項 都道府県別の恐山参拝者



第2表

観光地として、遠隔地の人々に注目されてきていることを物語るといえよう。その他が5%あるが、その中には、静岡、神奈川、愛知、石川、京都、兵庫、山口などの人々もあった。

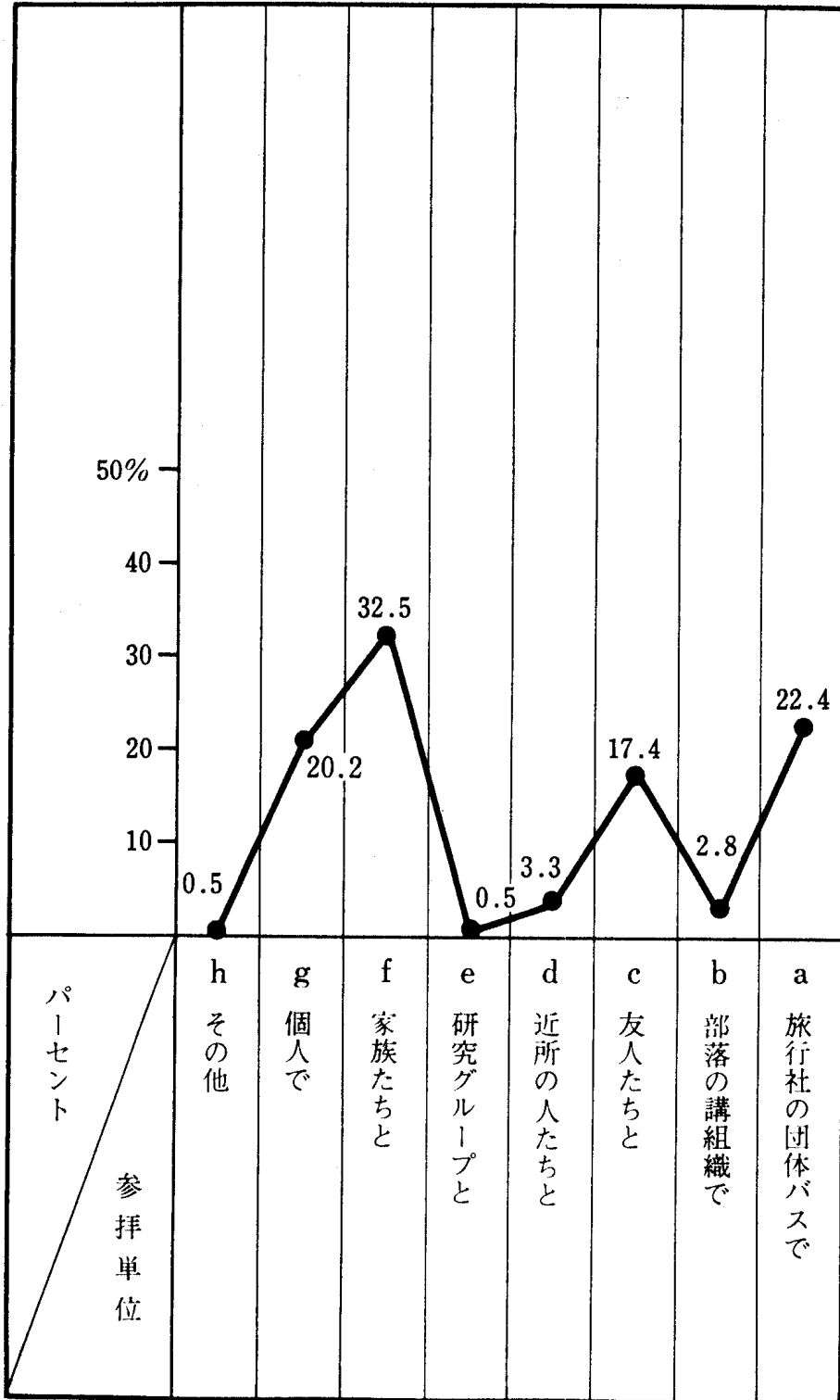
青森県在住者が過半数を越えていることは、もちろん当然の現象であるが、いま青森県を南部と津軽とにわけると、恐山の所在する下北が属している南部からの参拝者は七三名であって、青森県人の参拝者一二名によって百分率に換算してみると、六五・二%となり、津軽からの人々は三九名であって、三四・八%である。

ここで興味があるのは、この年（昭和四四年）に恐山に集まったイタコは三四名で、彼女たちを地域的に分けると、南部イタコが一四名にすぎず、かえって遠い津軽イタコの方が二〇名もきていたという点である。イタコの方は、地元の南部イタコよりも、交通のより不便で遠い津軽イタコの方が多かった。しかし、恐山参拝者の数は、反対に南部の方がずつと多い。もちろん、これは職業として、不便をいとわずに出掛けてくるイタコの立場と、半ばレクリエーションや観光のつもりでくる参拝者との、根本的にちがう動機によるものである。加えて、津軽地方では、恐山大祭の直前に、金木町の川倉地蔵での地蔵講⁽²⁾があつて、多数の人々が集まり、イタコも二〇名以上も集まってくるから、わざわざ不便な恐山までも足を伸ばす必要はないのである。

つぎに質問第六項の「参拝単位」について、実態を明らかにしてみよう。

つぎのページの第三表ではつきりするように、一番多かったのが「家族たちと」であつて、その次には、「旅行社のバスで」というものがつづいていた。三番目に多いのが、「個人できた」というものであつた。注目すべきは、「部落の講組織で」と答えた者は意外と少なく、二・八%すなわち五名にしかすぎなかつた。筆者は考えるのであるが、旅行社によるバス旅行というものは、新しい時代において、一種の講的機能を果しているとは言えまいか、

第6項 「恐山参拝単位」
全解答者の統計によるデータ



第 3 表

ということである。それは、古くから存在し、恐山とも密接に関連してきた地蔵講とは、非常にちがった世俗的でレクリエーションや観光旅行を主体とし、宗教的色彩はその一部であることが多い。けれども、過去の講にも世俗的要素はかなりあったわけで、旅行社の企画によるバス旅行は、むかしの小範囲の部落的地域社会の中に存続してきた講を、近代社会のより大きな地域社会に移植して、参加者を同好会的に開放性とし、企画そのものを、単一対象から多様性あるものへと改めた点において、近代性を帯びた講であると言えよう。

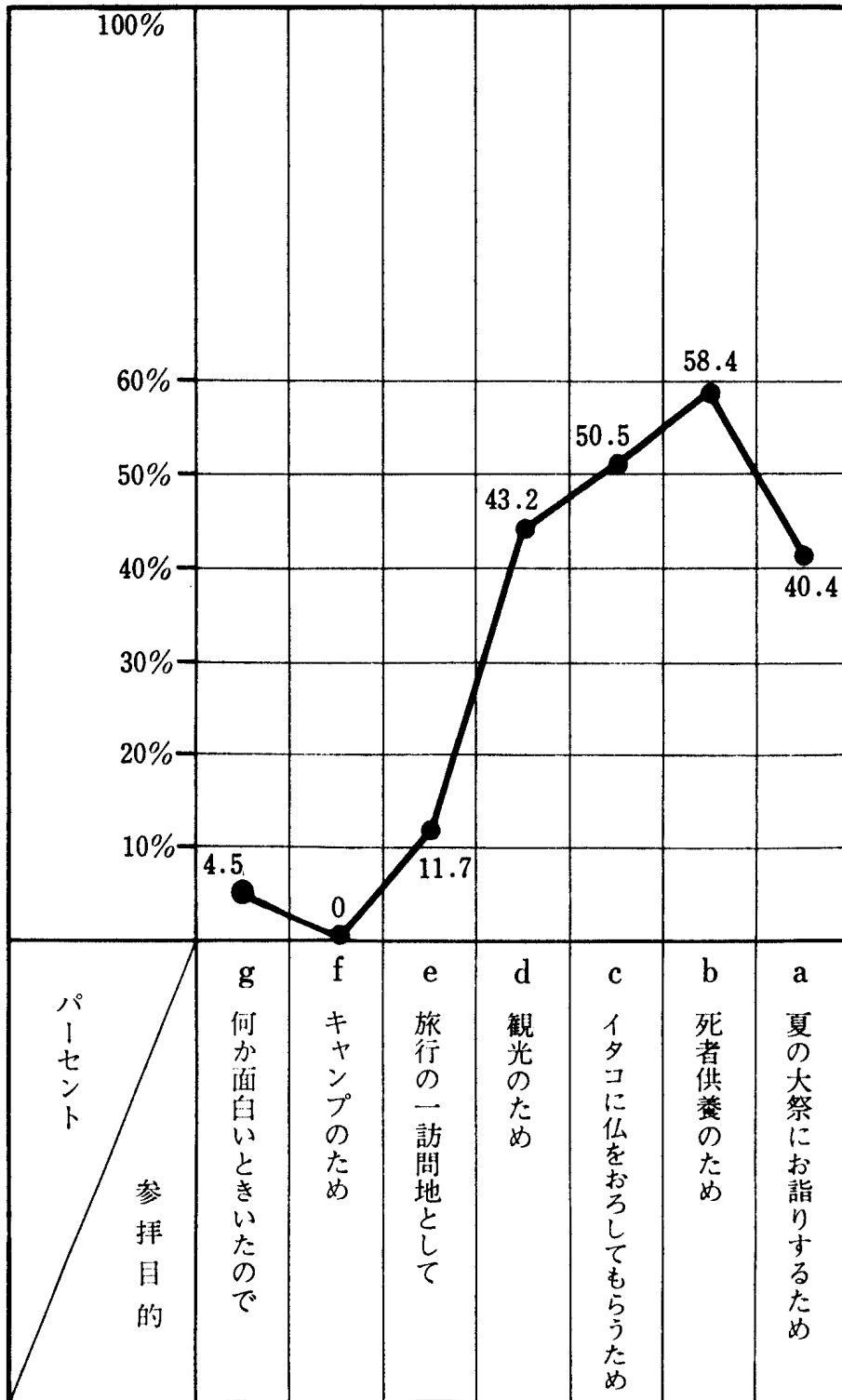
もちろん、それは本来的には、ビジネスとか採算を考慮された上での営利事業であつて、旅行や参拝の提唱者である旅行社の動機は、過去の講の世話人のそれとは根本的に異なっていることは事実ではある。しかし、筆者は、そのような相異点があつても、今後はこのような旅行斡旋業者による各種の宗教的企画を含んだ旅行が、伝統的な講の存在と活動とに、大きな影響を与え、それが果してきた社会的機能を新しいアイデアやプログラムの中に吸収して行くと思うのである。ここに、新しい講組織が形成されつつあるということができよう。

三 参拝者の目的

さて、次に人々は、どんな目的で恐山にくるのであろうか。実はこの点については、第七項と第八項とを比較検討する必要がある。両項の質問には、極めて類似したものもあるし、微妙な表現の違いがみられるものもある。この点では余りよく整理されていない印象を受けられると思われる。

第七項に対する解答は、その性質上、一人でいくつかの目的をもっているので、第四表のようにまとめてみた。

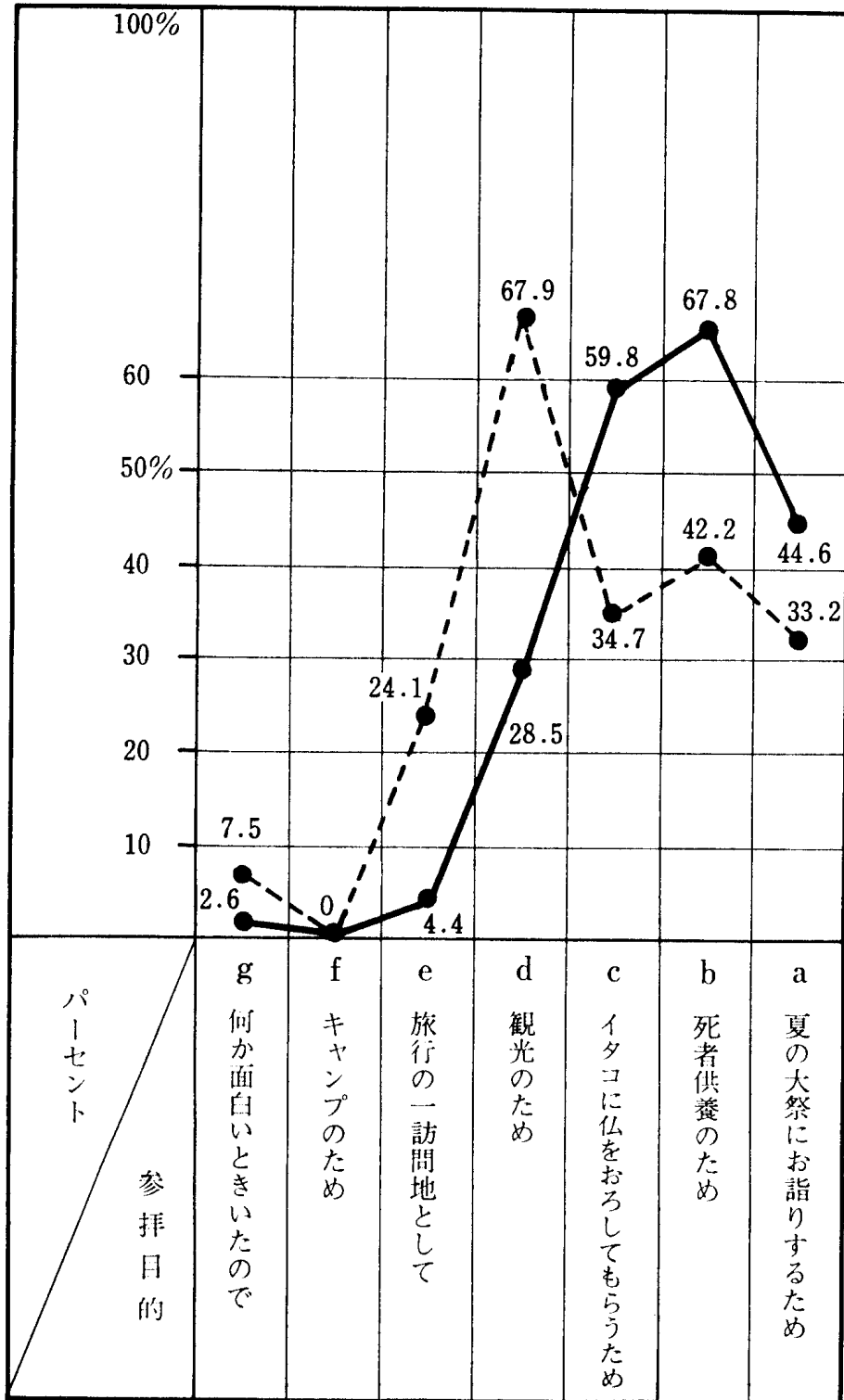
第7項 「恐山参拝の目的」
全解答者の総計によるデータ



第 4 表

第7項 「恐山参拝の目的」

●---● 他府県在住者 ●——● 青森県在住者



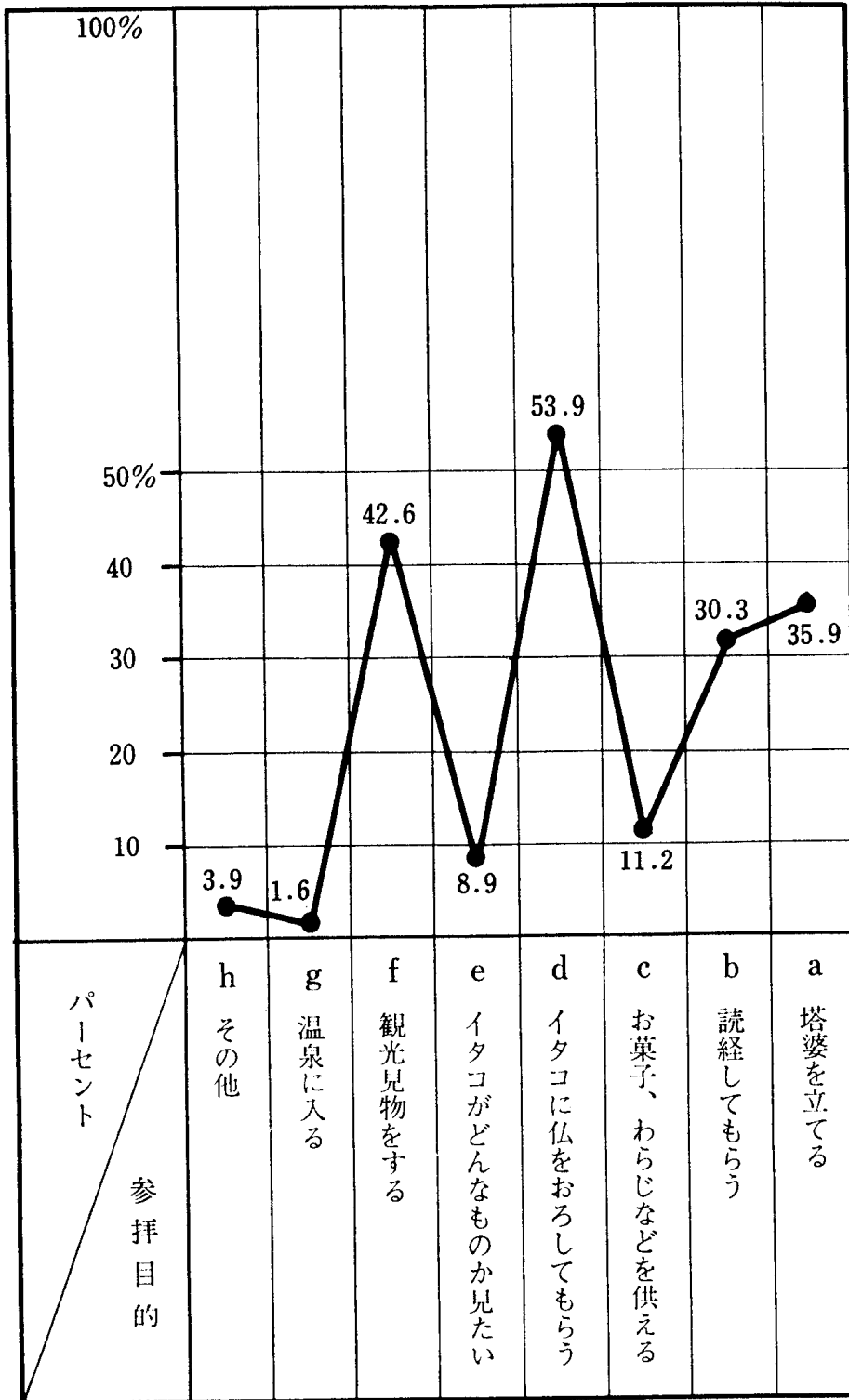
第 5 表

恐山の夏の祭は、死者供養が中心をなしているというのは、むかしは旧暦の地蔵盆におこなった地蔵講としての性格からいっても、当然と思われる。調査対象者の五八・四%が、bの「死者供養」を参拝の目的としているが、この人々の中の多くは、aの「夏の祭にお詣りするため」という項目にもマークをつけている。死者供養が一番高い反応を示しているが、二番目の目的としているのに、cの「イタコに仏をおろしてもらうため」、が五〇・五%あるのは注目すべきであろう。そして、dの「観光のため」とはつきりと答えたものが四三・二%であって、「夏の祭にお詣りする」、という四〇・四%をも越えていることは、恐山の夏の祭の存在理由を、大きく変えようとするものである。東北大学の楠正弘教授指導のもとにおこなわれた、下北の宗教調査の中には、恐山への下北地方六二部落の集団参拝に関するデータが発表されており、⁽³⁾そこでは、夏参りの目的の第一位は、死者供養の九〇%となっていて、筆者の調査とは大きくへだたりがある。しかし、これは、調査対象の相違にもとづくものであって、地元である下北地方の地蔵講そのものの存在の目的から考えてみて、おどろくまでもない。

いまここで、対象者を、青森県在住者と、県外人とに区別して、参拝目的を分類し直してみるのも、一つの方法であろう。

第五表で、実線は青森県在住者の参拝目的を示し、点線は県外人の参拝目的を示している。非常にはつきりしていることは、県外者は観光を第一の目的としているが、それに死者供養、イタコの口寄せ、大祭詣りがつづいている。群を抜いて多い観光目的を別として考えると、青森県在住者も、県外人も共通して、死者供養の次にイタコの口寄せを挙げている点は、注目しなければなるまい。このことは、第六表にまとめた第八項のアンケートに対する解答とも比較して考察すべきものである。

第8項 「恐山で何をしましたか、又しようと思っていますか？」
全解答者の総計によるデーター



第 6 表

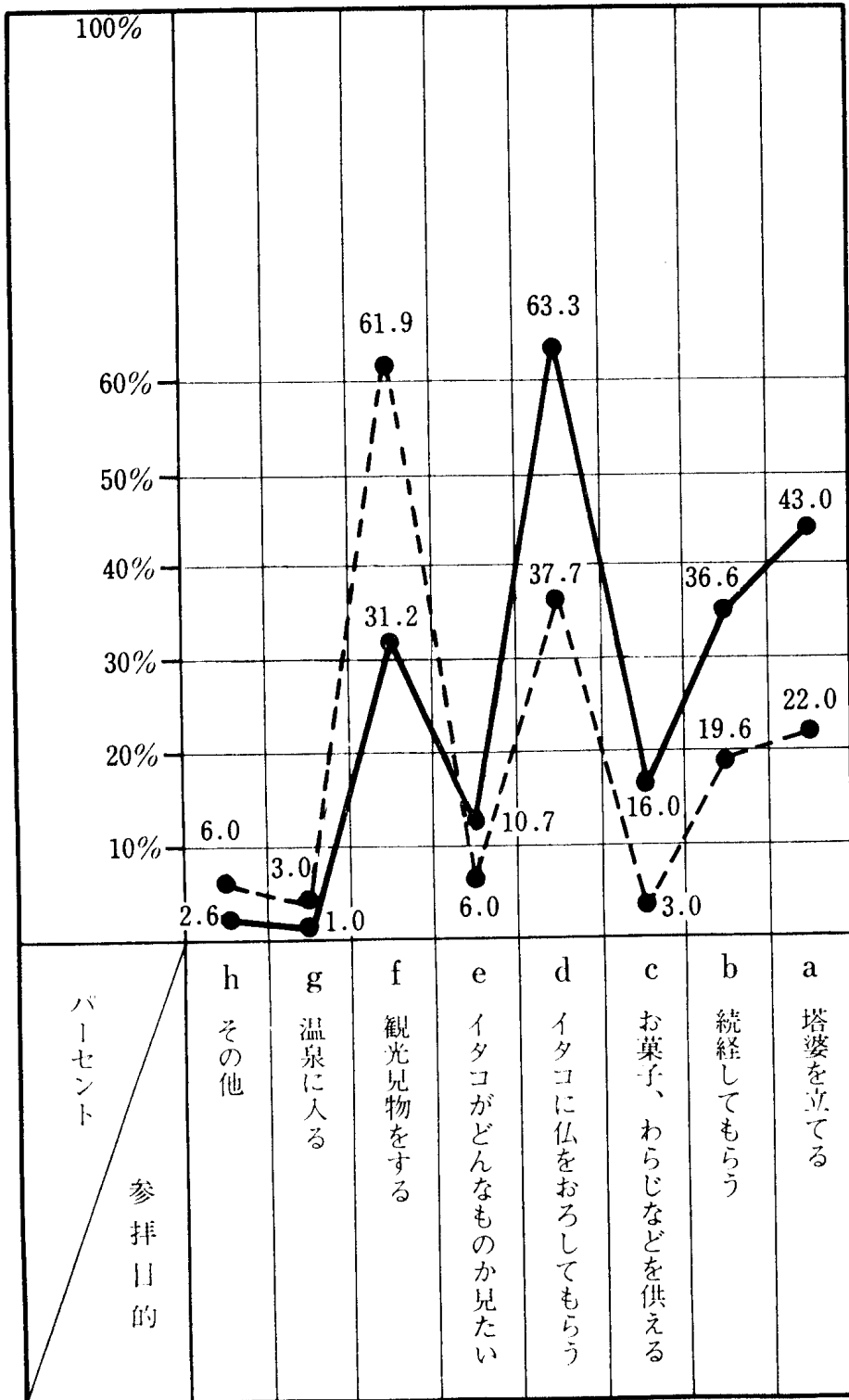
第六表は、恐山参拝の目的を、より具体的に、現地の実状に照して臨場感を含めて問い直したようなものである。第七項の冒頭にあった「夏の太祭にお詣りするため」という総合的な設問を削除した。また、「死者供養のため」を、具体的に、a 塔婆を立てる。b 読経してもらう。c 供養にお菓子、わらじなどを供える、の三項目にわけた。イタコに対する積極的関心を示すものとして、d の「イタコに仏をおろしてもらう」、を考えた。また消極的な好奇心にとどまるものとして、e の「イタコがどんなものか見たい」を作った。また観光的な目的を、f と g とにわけてみた。このようにして、問題を細分化して質問してみた結果は、次のようなものとなった。まづ対象者全体のグラフを紹介しよう。第六表をみればよくわかることであるが、イタコに対する関心が参拝者の中で一番強いという結果が出ているのである。

第四表では、死者供養が参拝目的の中で第一位を占めていた。しかし、それを細かくわけて問い直してみると、塔婆を立てることによって死者供養を果したと考える者や、宴の河原のところどころに、駄菓子の一つまみを供えつつ死者の冥福を祈って、供養をすませたと考える者もいるのである。いくばくかの金子を献げて、読経を依頼すること、死者に対する遺族の義務をすせたと満足する人々もいるであろう。このように「死者供養」という言葉には、かなり広い解釈の余地が残されているが、「イタコに仏をおろしてもらう」ということは、非常に明確で、また狭い目的であるとも言えよう。筆者は、死者供養ははなはだ抽象的かつ総括的であって、これを三項目に細分したときに、その個々はイタコの口寄せと同じ程度の次元に具体化されるものと考えている。

いずれにしても、過去はさておいて、現代の恐山参拝者の最も興味ある目的は、イタコによる口寄せであるということ、決して過言ではないのである。ここで、恐山参拝者を、第七項においておこなったように、青森県在住者と、

第8項 「恐山で何をしましたか、又しようと思っ
ていますか？」

●---● 他府県在住者 ●——● 青森県在住者



第 7 表

県外者とにわけて第八項に対する解答を比較検討してみよう。実線は青森県在住者のデータであり、点線は他府県在住者のそれを示している。第五表は、死者供養を細分しないで質問した結果であったが、それを三つに細かくわけた後に明確となってくるのは、第七表によって明らかになるように、青森県在住者の一番興味の対象となっていたのはイタコの口寄せであった、ということである。つぎに、他府県在住者の第一の目的は、観光見物であって、その次にくるのが、イタコの口寄せ、となっている。

恐山の円通寺当局からすれば、恐山の夏の祭は、もともとイタコとは何のかわりもないものであった。イタコは大正時代になって、恐山の祭を稼ぎの場所として出掛けてくるようになったものである。それが、何時の間にか、円通寺の本来の夏まつりの目的とは異質的な、イタコの口寄せが、参拝者の第一の興味の対象となり、寺院の意図するところと違って、庶民の心を最も強くひきつけている。この事実は、職業的宗教家が考えてきた機能化した、年中行事化した死者儀礼よりも、庶民の心は、はるかに動的な、生者と死者の間の結びつきの連続を求めつづけている事を証明するものであろう。いまや、イタコの果たす役割は、恐山にとっては、無視しえないものとなっている。遠く県外からくる団体参拝者にとって、イタコのいない恐山は、魂のぬけた形骸のごとき、味気ないものとなっている。イタコのいない恐山は、期待を裏切られた思いを、遠来の訪問者に与えるように思われるのである。この事は、他ならぬ恐山円通寺の僧侶自身が、間接的に認めているところである。⁴⁾ 極端すぎる表現かも知れないが、今や恐山では、イタコが、庶民にとって、もっとも魅力ある存在となっているのである。

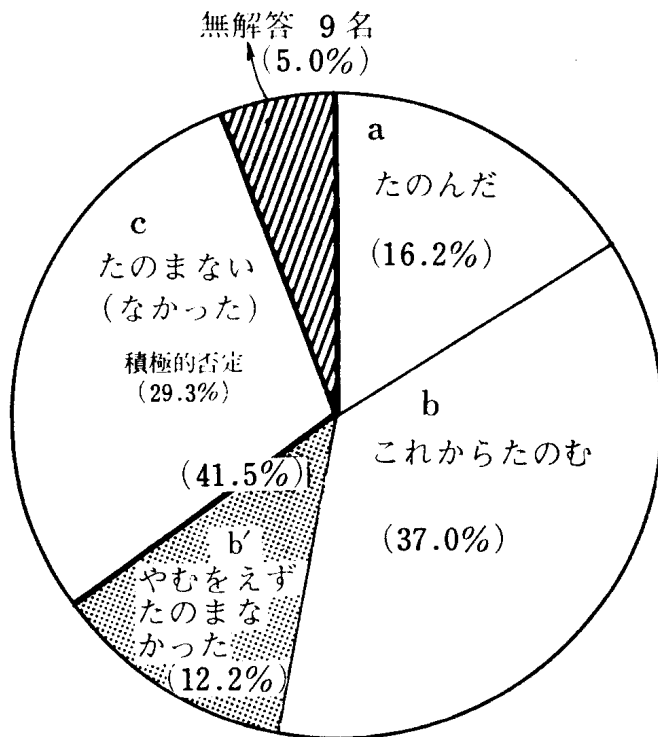
質問の第九項は、恐山参拝者の恐山に滞在する期間の調査であった。結果は、九〇%近くが日帰りであって、八%は宿坊に宿泊し、二%は境内の地藏堂や無漏館という休憩所にゴロ寝する人々であった。恐山を訪れようとする場合

は、日帰りでは、切角の参拝も価値は半減しよう。ほのかなろうそくの明りに浮きぼりされたような、イタコの顔を眺めながら、取りかこんでいる老婆（アッパー）たちに混って、口寄せ物語りに耳をかたむけ、鼻をつく硫黄の臭いをかぎ、荒寂たる塞の河原の陵線の上に、無気味に照り輝く赤味を帯びた月の光を仰ぐ時、はるばるとみちのくの恐山にいる実感が迫ってくるのである。

四 参拝者とイタコ

筆者は、昭和四二年の七月から、恐山のイタコと接触を保ってきたが、四四年七月に至って、三名の大学院学生諸君の協力によって、ようやく、恐山参拝者が、イタコに対してどのような関心を抱き、印象をもち、彼女たちの口寄せに対して評価をもっているかを明らかにすることができた。以下に、調査項目の順序に従って、整理してみよう。

質問第一〇項は、「イタコの口寄せについて」であって、a、すでに口寄せをすませた。b、これからたのむつもりである。c、たのまない（なかった）。にわけて調査した。対象者一七八名のうちで、この三つの何れにも当らぬとして、無



第 8 表

第10項 「イタコの口寄せについて」

解答が九名(五・〇%)あったが、結果は、第八表のごとくなる。この表でみればはっきりするが、口寄せをたのまないし、又やむをえざたのまなかつたというのを合計すると、四一・五%となつて一番多くなつてはいる。しかし、一方では、aとbとは、イタコの口寄せに対して積極的な関心を示しているもので、両者を合計すると五三・二%と過半数を占めることになる。さらに、「やむをえざたのまなかつた」人々にその理由をたずねた時に、「時間がなかつたので」と答えた者や、「死者の命日を知らなかつたので」、「何となく気おくれがしたので」また「言葉がわからなかつたので」と答えた人々があり、これらは、積極的にイタコの口寄せに対して、否定的態度をもつていたのでなく、状況がそれを許さなかつたので、やむなく、断念した、というものである。したがって、状況が許せば、口寄せをたのむ意志は充分にあつたものとみなしてよい。これらの解答者をb'として、 $a + b + b'$ としてみると、口寄せに対して、積極的否定を示す者は、四一・五%マイナス一二・二%となつて、二九・三%と減少するのに反して、 $a + b + b'$ 、すなわち、イタコの口寄せに対して、強い関心を示すか、状況が許せば、自分も口寄せを依頼したかつたと言ふ肯定的態度の人々を含めたパーセンテージは、六五・四%となつて、その比率は、ほぼ否定三に対して肯定七ということになる。

たしかに、イタコの横に坐つて、依頼者が口寄せの言葉に涙し、うなづき、嗚咽しているのを目の当りにすれば、信じられぬという気持も一面にはあるけれども、一度自分の死別した近親者を呼び出してみたい、という衝動的気持におそわれるのは、事実である。しかし、青森県外からの参拝者にとつては、言葉の上のハンデキャップや、旅行社のバスでできた人々には、出発時間の制約などがあり、多類を占める青森県の人々がイタコとかわす津軽弁や南部の言葉に辟易して、自分は他所者であるという気持が強く支配し、思い切つておろしてもらふこともできず、心を残しつ

つ恐山を去って行く人も少くないのである。

第一項の質問は、口寄せをたのまなかった、と答えた七四名の人々に対して、その理由をたずねたものである。これを一〇〇分率で換算してみると、解答の一番多かったのは、a、信じないから、の二五・六%、その次にはb、興味がないから、の二〇・二%があったが、三番目には、e、の時間がないから、の一六・二%があった。h、のその他の項目の中では、言葉がわからないために興味をもちながら、やむなく断念したというのが、八・一%あった。このeとhとは、前述したように、aやbとは性格を異にしている点を留意しなければなるまい。

次に、第一二項は、「あなたは誰をおろしましたか」又は「これからおろしてもらおうつもりですか」、という質問であった。これに対する解答は、一人で父と母とおろしてもらったとか、その他の複数の解答もあった。今これを順に示すと次のようになる。父二〇・一%、母二〇・一%と同数であって、つぎに子供の一三・六%がつづく、これはかなり高率であろう。そのつぎには祖母と夫が、それぞれ八・六%となる。そのあとには、弟の五・七%、祖父の五・〇%、兄の五・〇%、姉の五・〇%と同率がつづく。そして親戚の三・五%、妹の二・一%、その他の一・四%となって、妻をおろしてもらう人は〇・七%にすぎなかった。これは、必ずしも、先立った妻に対して、夫が冷淡であるというのでもあるまい。男子と女子の死亡率や、恐山参拝者の性別、年齢別の相違、特に五三頁の四行目で指摘したような事実などが、考慮されなければならない。

第一三項は、「何人位仏をおろしましたか」という質問であったが、回答者は八八名あった。そのうち五六名(六三・六%)は一人と答えた。二人と答えた者は一九名(二一・五%)、三人といった者は一〇名、四人以上が二人、不明といったイタコのマニヤは一人いた。

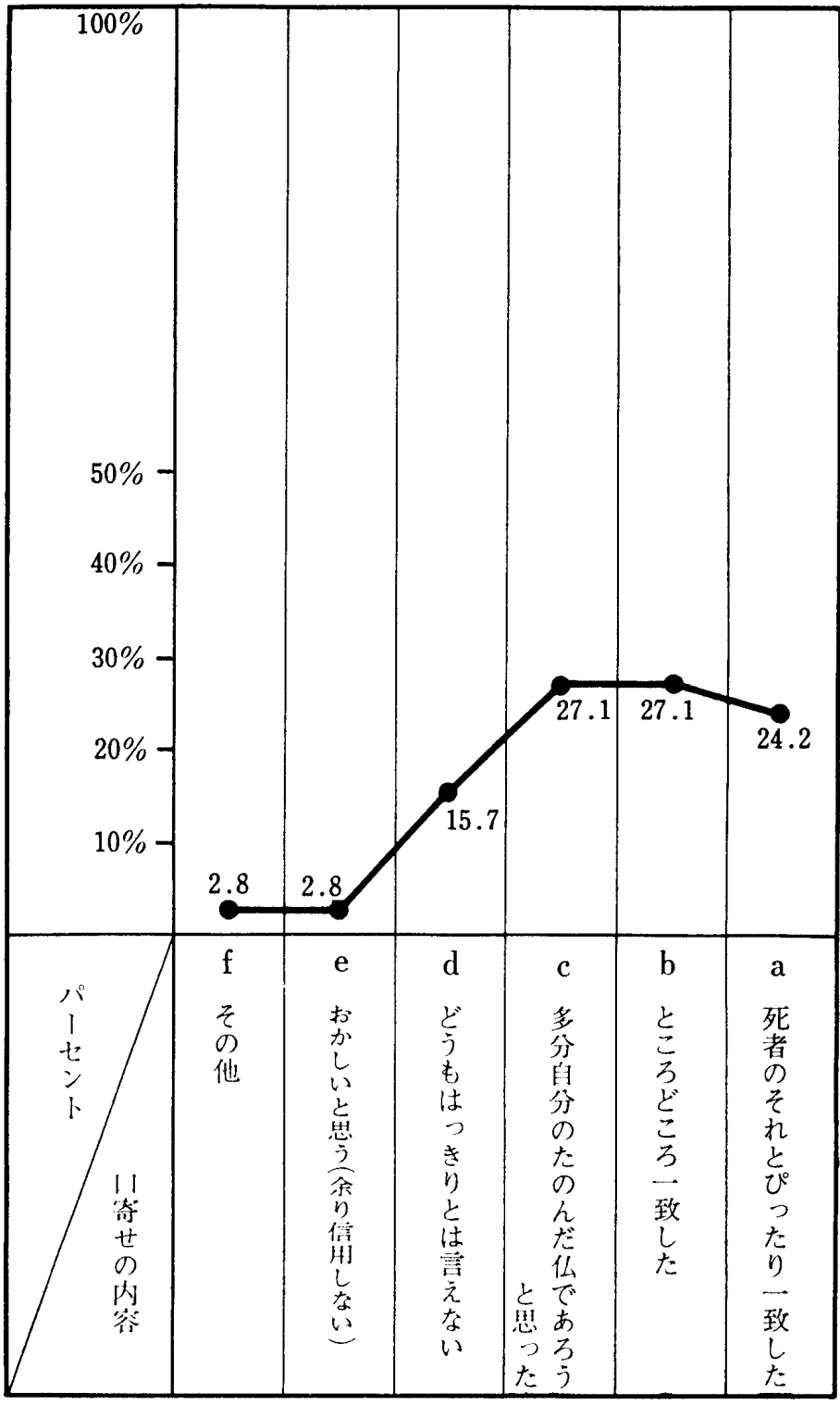
つぎに、第一四項として、「イタコは何人位たのみましたか」とたずねてみた。八一名の回答者のなかで、一人と答えた者が圧倒的に多く、六七名（八二・七％）あった。二人のイタコに、と答えたのが三人とずつと少なかったが、何人のイタコたのんだのかわからない、と答えたのが九人もいた。

質問の第十五項は、「イタコの言葉について」である。これはなかなかむつかしい問題であって、イタコの個人差が大きく影響してくる。相対的に老齢のイタコは難解であるが、若くなる程よくわかる。なかには南部イタコで非常によくわかる者もいた。又、口寄せを依頼した者が、青森県在住者か否か、津軽弁や南部弁をどれ程知っているか、によっても、この解答はちがってくる。また、イタコは、イタコ独特の用語を使用するので、青森県人でも、必ずしもイタコの言葉が全部理解出来るものではない。

a、よくわかった、という回答をしたのは、六七名のなかで二〇名（二九・八％）であった。b、大体わかった、というのが二二名（三二・八％）いたが、逆に、c、少ししか、ききとれない、と回答したのが一二名で、dの、ほとんど、わからない、というのは、実質的にはcと同じことになるが、五名いた。eの「全くわからない」というのは三名であった。興味がある事實は、c、d、eの否定的な回答を寄せた二〇名のなかで、過半数の一二名は、青森県の人たちであったことである。また、a、bの肯定的回答をした四二名のなかで、七名は県外の人々であった。

つまり、イタコの言葉が、よくわかるか否かは、自分が依頼しようとするイタコが、どの程度強い津軽弁や南部弁を使うか、という点と、口寄せの中で、どれ程多くイタコ独特の用語を反復して使用するか、そして依頼者自身が、どれ位、それらを理解する能力をもっているか、にかかっているわけである。したがって、依頼者は、まずそれらの点をたしかめてイタコを選ばなければならない、ということになる。

第16項 「口寄せの内容について」



第 9 表

第一六項の質問は、第九表に示されるごとく「口寄せの内容について」である。この項に対する回答者は、七〇名あった。内容を六項目に細分して、a、死者のそれとぴったり一致した。b、ところどころ一致した。c、多分自身のたのんだ仏であろうと思った。d、どうもはつきりとは言えない。e、おかしいと思う。f、その他、としてみた。これらのうちでa、b、は積極的に、イタコの口寄せが、死者のものであると肯定しているものである。c、については、一部に疑惑を抱かないわけではないが、恐らく死者のものであると納得しているわけであるから、 $a + b + c$ は、一応口寄せの内容に肯定的立場をとるものと言えよう。第九表は、七〇名を百分比であらわしたものである。

この表をみるとよくわかるが、回答者のなかで、内容に肯定的な印象をもっている者は、 $a + b + c$ であるとする、七八・四%という数値を示し圧倒的に多い。d、の「どうもはつきりとは言えない」は、肯定とも否定ともどちらにもはつきりと態度をきめかねているもので、懐疑的ではあっても、否定的とまではいえない。したがって、イタコに死者をおろしてもらい、その口寄せに関して、はつきりと否定的印象をもって、失望の気持を表明している者は、七〇名のなかで、僅かに二名（二・八%）にすぎないのである。そして、八〇%近くの人々は、イタコを通して、愛する死者との間に言葉による交流がおこなわれたのみでなく、死者がかれらのためにたえず守りつづけていることを聞いて満足して帰って行くのである。

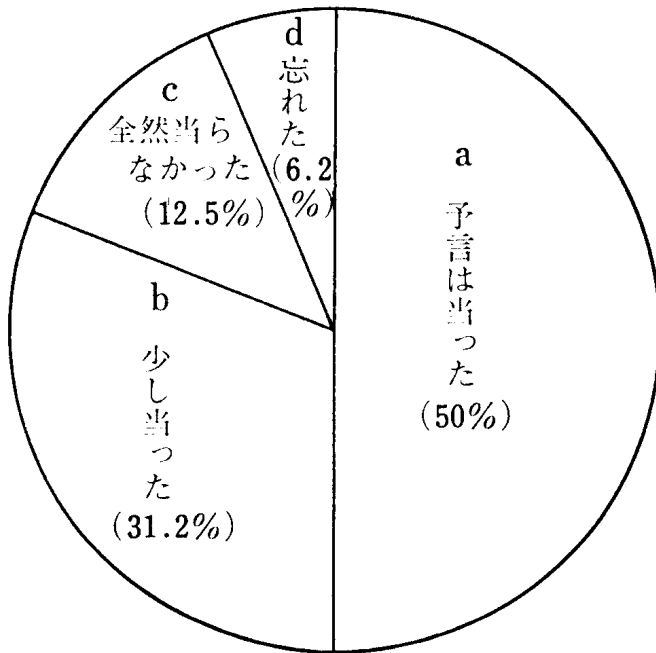
もちろん、厳密な分析を加えるならば、回答者がイタコの口寄せを聞いているうちに、他者暗示または自己暗示にかかつて、無意識のうちに、それが死者の真実の語りであると思ひ込むようになった、というべき点が多いかも知れないが、回答者たちの実感として、右に示したような結果が出ているということは、重要であると思う。

第一〇表に示された第一七項の質問は、イタコがおこなう口寄せのなかでの予言についてである。問題の性質上、

回答者はわれわれが調査を試みた昭和四四年七月以前に、既に或る期間にわたって、イタコと接触があった人に制限された。そして、その時なされた予言が、どのような結果を生んだか、という質問である。回答者は四八名いた。第一〇表をみればよくわかるが、a、「予言は当った」、と答えた者は五〇%にも達していた。次にb、「少し当ったと思う」、という者は三一・二%であった。そして、「全然当らなかつた」、と回答した者は一二・五%しかいなかつた。また、余りイタコの予言については真剣に考えず、「どんな予言をしたかについて忘れてしまったので、何とも言えない」、という無関心な者はわずかに六%であった。

次は第一一表にまとめた質問、第一八項であつて、過去におけるイタコとの接触についてたずねた項目である。質問は、以下の四つにわけておこなわれた。a、「今までに〇回位あつている」。b、「その場所は、〇〇である」。c、「こんど始めてイタコにあつた」。d、「イタコのは、ニユースや本などでできたことがあるか、どうか」。これらの質問は整理されていない点があるが、回答者の今日までのイタコとの直接、間接の接触の有無と、その場所とについて知ろうとするものであつた。bはaに付随した質問であつて、aとcとが比較されるべき関係にあるので、bはあとにして、まづaとcとをみることにしよう。第一一表

第17項 以前イタコに仏をおろしてもらつたことがある人に対して



第 10 表

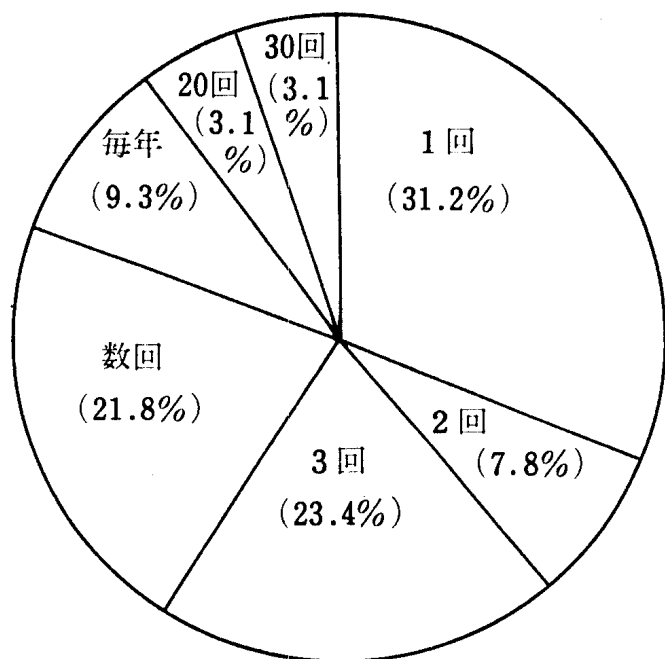
をみればよくわかるが、一回から三回までを合計すると、回答者六四人のうちで六〇%以上になっている。毎年とか、二〇回、三〇回と答えている人々もいる。この全調査の対象者総数は一七八名であったから、いまそれを一〇〇としてみると、全対象者のなかで、過去にイタコと接触ありと答えた六四人は、三五・九%となる。そしてそのなかで三回以上の、接触者は、三九名であって、調査対象者全員（一七八名）の二一・九%にもなっているのである。

さて次に、こんど始めてあった、という者は、前の a 項「今までに〇回位あっている」に対する回答者以外がすべて該当するわけであって、一七八名のなかで一四四名、すなわち六四%は、恐山で始めてイタコの口寄せという異様な風習に接したというわけである。

ここで、あとまわしにした b 項「イタコと会った場所」についての回答者の反応をみよう。六四名が回答しているが、そのうちで、二八名（四三・七%）が恐山をあげている。ついで一〇名（一五・六%）が八戸と回答している。これは、八戸市及びその周辺のいくつかの寺院、たとえば百石町の法蓮寺、尻内町の青竜寺、八戸市内の永福寺などを意味しているものと思われる。その他の場所としては、回答者の数はずっと減少する。参考までにそれらを列記しよう。青森市内六名、大湊三名、弘前二名、他に南部地方では下北一名、三戸一名、津軽地方では蓬田村一名、金木

恐山参拝者宗教調査（小林）

第18項 過去におけるイタコとの接触



第 11 表

町一名、岩木町一名、津軽高野山（弘法寺）一名などがある。青森県外では、宮城県気仙沼、名取、一関、岩手県盛岡、秋田市がそれぞれ一名となっている。また北海道の留萌^{ルモイ}が一名ある。

これらのなかから、少し補足説明を要するものがある。第一一表で示した三〇回もイタコと接触していると回答した二人を調べてみると、一人は宮城県気仙沼の男子で、イタコに会った場所は、気仙沼と答えている。これは、恐らく筆者が以前から調査の対象として考えてきた気仙沼に本部をもつ神道大和宗との関係であろうと思われるが、その点は後日の調査にゆだねたい。もう一人は青森市古館の七一才の老人であった。また二〇回もイタコに会っていると回答した北海道の留萌からきた五三才の婦人は、留萌でイタコに二〇回も会ったと言っているが、恐らく彼女は、いわゆる霊媒をおこなう留萌の祈祷師と、イタコとを混同しているのではあるまいかと思われる。彼女は、姉妹三人と恐山に仏をおろしてもらうことを第一の目的としてきていた。そして彼女は、「出来るだけ多くの先祖をおろしてもらいたい」と答えていた。青森県外者の場合は、イタコとカミサンや祈祷師の区別がまだ判然としない人々も多いので、実際に彼等がイタコなるものに会ったものか、それとも祈祷師を誤解して、イタコであると考えているのか、その辺は余りはつきりとは言えない点がある。過日東津軽郡の蟹田村でおこった母親による息子殺害事件に関係したゴミソ鈴木キクについて、彼女がイタコであったと新聞は報道している。⁽⁶⁾このようなケースをみても、イタコ、ゴミソ、祈祷師、霊媒者などの混同が、イタコ研究の上で注意しなければならない問題点なのである。

五 参拝者の宗教

さて、ここで調査の角度をイタコから、参拝者の家庭の宗教や、本人の宗教的関心、さらに聖書やキリスト教との接触の度合いなどに変えてみよう。質問の第一九項として、参拝者に「家庭の宗教（宗派）は何ですか」とたずねてみた。調査を担当した三名には、宗派をたずねるようについてあったが、それでも「仏教」としか答えなかったという事実は、一つの問題を提起しているということができよう。いま、回答者の答えたままを、順次列举してみると左の如くなる。

禅宗	二五名（一四・〇％）
浄土宗	二四名（二三・四％）
仏教	二四名（二三・四％）
わからぬ	二三名（一二・九％）
真宗	一六名（八・九％）
日蓮宗	一五名（八・四％）
なし	一五名（八・四％）
真言宗	一四名（七・八％）
曹洞宗	一三名（七・三％）
天台宗	四名（二・二％）
無解答	四名（二・二％）
神道	一名（〇・五％）

恐山参拝者宗教調査（小林）

右の表で、禅宗と答えた者が一番多い。もちろん、禅宗という宗派は存在していないから、これと曹洞宗とを合計してみると、三八名となって、二一・三%と最高になる。次に興味のある点は、「わからない」と答えた者がかなり多くあることである。この回答者には二〇才台の青年がかなり多くいたが、五〇才前後の人の中にも「わからない」という者がいた。また、家庭の宗教が「ない」と答えた人々が一五名いたことも、注目すべきところである。この一五名のなかで、八名は一〇台から二〇台の青年男女であったが、他は三〇台から五〇台にかけての人々であった。これらの「わからない」、「ない」、「別にない」などと答えた人々の合計は三八名となるので、先に禅宗と曹洞宗とを合計したものと全く同数となって、首位に肩を並べることになる。これは相当重要な問題であると思われるのである。神道と答えた者が、わずか一名にしかすぎなかった。また、キリスト教と答えた者は、一名もいなかった。つぎに、第二〇項の質問として、個人の宗教や、宗教に対する興味についてたずねてみた。四つの質問にわけたが、重複した回答があるので、左に列記してみよう。

- | | |
|---------------|-----|
| a、特になし | 八〇名 |
| b、宗教に興味をもたない | 六六名 |
| c、家の宗教をそのまま受容 | 二〇名 |
| d、私の宗教は〇〇である | 六八名 |
| 内訳 | |
| 1、浄土宗 | 一四名 |
| 2、禅宗 | 一三名 |
| 3、曹洞宗 | 一名 |

4、真宗	九名
5、日蓮宗	七名
6、真言宗	六名
7、仏教	五名
8、無解答	四名
9、天台宗	三名
10、神道	一名

この表でも、2と3とを一緒にすれば、禅宗は問題なく、個人の宗教の中でも二四名と一番多い。この統計からも考えられるように、宗教に対して特に興味を抱かず、したがって、個人の宗教としても「特になし」とする者が大きく第一位を保持しているという事実は、宗教活動にたずさわる者としては、十分に念頭に入れておくべきものである、と考える。神道と答えた者が、前のものと同様に一名しかいなかった。この事は、人々が神道に無関心であることを意味するものではなく、日本の宗教の研究、特に個人や家の宗教を考える場合に、神道がおかれてきた立場、徳川時代の対仏教政策、また明治維新政府にはじまる「神道非宗教論」なども考慮されなければならぬのである。

個人の宗教をたずねた場合も、ついにわれわれは、「私の宗教はキリスト教である」と答える者を一人も見出しえなかったことは、やはり淋しいものであった。けれども、仙台から来たという四〇才の婦人が、現在子供が教会に通っており、「自分も個人の宗教としては、キリスト教に近い」と答えているのがあった。又、反面、地元、田名部の四四才の銀行員は、「キリスト教は大変よいが、牧師がつまづきになる」と回答した。何か個人的に、その発言を裏

付けるにがい経験を持っているのかも知れない。

最後に、一七八名の調査対象者が、聖書やキリスト教と、どのような接触をもったことがあるかを明らかにしてみよう。これは、われわれの恐山での一つの大切な調査事項であったのである。第二一項は、聖書について、a、「よんだことはある」。b、「よんだことはない」。に分類してみた。肯定的な回答aに印をつけた者は、六六名で、否定的なbに対しては一二二名が含まれていた。いまここで、質問第二一項と第二二項に対するアンケートの結果を表に示してみよう。それから、回答者の地方別にそれを再び整理して、地域別にキリスト教との接触の度合いを明らかにしよう。

第二一項 聖書について

- a、よんだことはある。六六名(三七・〇%)
- b、よんだことはない。一二二名(六三・〇%)

第二二項 キリスト教との接触

- a、集會に出たことはある。五一名(二八・六%)
- b、集會に出たことはない。一二七名(七一・四%)
- c、出席した集會の種類。

- (1) 礼拝 二六名
- (2) 教会学校 一三名
- (3) 伝道集會 三名

- (4) 結婚式 二名
- (5) 学校のチャペル 一名
- (6) 療養所で 一名
- (7) クリスマス 一名
- (8) 洗礼式 一名
- (9) 無解答 七名

d、キリスト教ラジオ放送。

(1) きいたことがある。六七名(三七・六%)

(2) きいたことはない。一一一名(六二・四%)

e、キリスト教テレビ放送。

(1) みたことがある。三二名(一七・四%)

(2) みたことはない。一四七名(八二・六%)

右のデータについて整理してみよう。まず第二一項の「聖書について」は、予想以上に高い数値を示した。本州最北端の奇祭といわれている恐山の大神に集まってきた人々のなかから、アト・ランダムに抽出して行なった調査の結果、回答者一七八名のなかで、三七・〇%に当る六六名が、「よんだことはある」と答えているのである。もちろん、どの様によんだのが問題だと、一言居士は言うかも知れないが、とも角、聖書にふれる機会があったことは事実である。また第二二項でたずねた、「キリスト教の集會に出席したか、否か」の調査も、決して低い数値とは思われな

いのである。しかも、集會出席者の半数以上が、礼拝に出席した経験もある。

最も注目すべきデータは、d項の、「キリスト教ラジオ放送」に対する回答として、六七名(三七・六%)が「聞いたことがある」と答えている点である。これは、聖書をよむことよりも、マス・コミュニケーションのラジオによるキリスト教放送との接触の方が、高い数値を示していることを証明しているものである。ラジオ放送そのものの、日本における将来性という問題は、非常に重要なものであるが、少なくとも、一般人にとって、キリスト教に接触する最も手軽で、効果的なものは、現段階では、ラジオ放送ということでは、間違いないところであろう。これは、特に都市をはなれて、教会もなく、テレビも選択の出来るチャンネルもわずかであると言うような地方では、特にラジオ放送が大いに利用されている、という事実とも符合するのである。後にもふれるつもりであるが、大都市に住む人々よりも、テレビ網の「暗い谷間」にある地方在住者によつて、ラジオ放送は大いに利用されている、という事実を、われわれは、今回のアンケートによつて、改めて知ることが出来たのである。

キリスト教テレビ放送は、今後のテレビ網の発達に大いに影響されるところがある。地方によつては、視聴可能のチャンネルが少ないために、番組が制限されてしまうことになる。e項の質問は、「キリスト教テレビ放送」をみたことの有無に対するものであった。この問に対して、「あり」と答えた者は三一名で、四つの方法によるキリスト教との接触、すなわち、①聖書、②集會、③ラジオ、④テレビのなかでは、最も少なかった。けれども、今後はかなり伸びるであろうと思われる。もつとも、テレビ網が整備されても、宗教番組のテレビ放送は余り期待出来ない面もある。というのは、多くのチャンネルの視聴が可能になった場合、どうしても娯楽番組の方がよるこばれるわけで、むつかしい宗教番組よりも、世俗的なものが選ばれて、反つてキリスト教テレビ放送は、視聴者をひきつけるような

第21、22項 府県別のキリスト教との接触の有無

府県	接触回答者	調査対象者	パーセント
青森県	六五名	一二二名	五八・〇
北海道	九名	一三名	六九・二
岩手県	六名	一二名	五〇・〇
宮城県	六名	一二名	五〇・〇
東京都	六名	一二名	五〇・〇
福島県	三名	五名	六〇・〇
埼玉県	二名	二名	一〇〇・〇
京都府	二名	二名	一〇〇・〇

第 12 表

内容のものを研究しない限り、完全に敬遠されてしまう結果にもなりかねない。ラジオやテレビは、ダイヤル、チャンネルの選択権が視聴者にあるから、その点に関する専門的な研究、調査が必要であろう。

さて、ここで調査の角度を変えて、右の第一二表のように、第二一、二二項に対する回答者を、地方別にわけよう。この二つの項目に対して、なんらかの肯定的な回答、すなわち、「キリスト教との接触が、幾分でもあった」という対象者だけを抽出してみると、調査対象者一七八名のなかで、一〇六名が該当していることになる。

いま、このデータに対して、調査対象者全員を地方別に分類した第二表の人数を下に記述して、それを一〇〇と

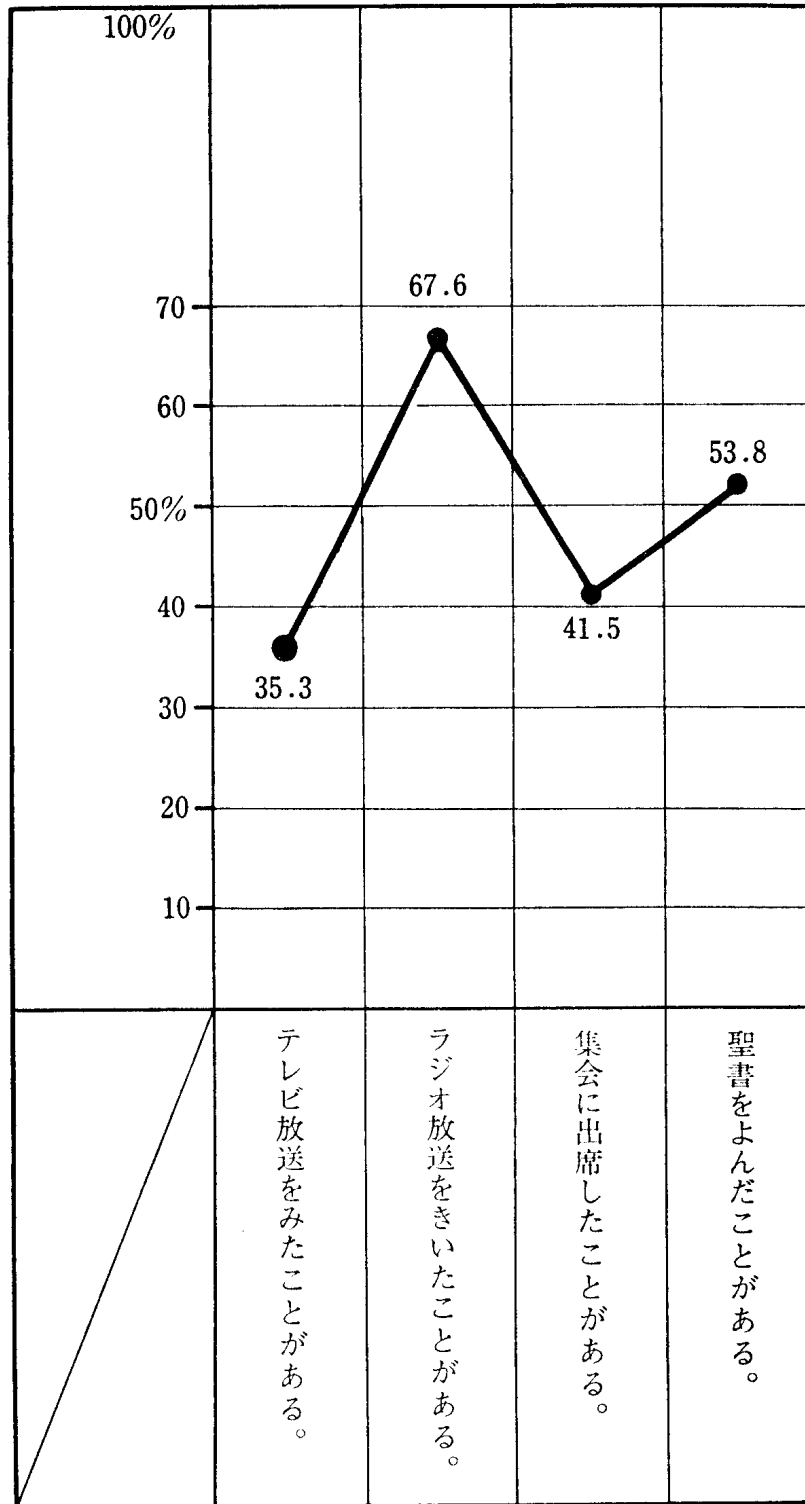
して、最上段の数値をパーセントで示してみると、地方別の、キリスト教との接触の度合いを知ることが出来るのであるが、回答者が二、三名というこの第一二表のパーセントには、あまり大きな意味を与えない方がよいかもしい。この表の京都府の次に、秋田県、横浜市、静岡県、愛知県、石川県、兵庫県、山口県が、それぞれ一名ずつある。もちろん、統計とか、アンケートというものは、完全なものはないし、その取り扱い方そのものについても、色々問題はあつた。しかし、右の表をみて考えられることは、東北とか北海道は、必らずしも、「福音に接する機会が少ない地方」とは、もはやあまり言う事はできない、という点である。北海道や青森在住の人々で、キリスト教との何らかの接触を肯定した人々は、その職業、年齢、性別を検討してみた結果、いわゆるホワイト・カラーに属する人々ばかりではなかつたし、二〇才台の青年男女が多数を占めていたわけでもない。四〇〜六〇才の男女が過半数を占め、農業、主婦などと答えた人々もおおむねに多かつた。北海道在住者で、キリスト教との接触を認めた九名の回答者のなかで、二〇才の青年男女は四名であつて、あとの五名は三〇才から七〇才にいたる男女であつた。これとは反対に、東京在住者で接触を認めた六名は、調査対象者のなかの半数（五〇％）にすぎない。東京県内にどれ程教会が多くあるとしても、絶対的な人口が圧倒的に多いのであるから、都民全体のキリスト教会との接触は、おどろく程に貧弱であり、一部の人々に傾よつてゐるのであろう。更にもう一つの注目すべき事実は、東京在住者六名のなかで、ラジオによるキリスト教との接触を認めた者は一人あつたが、テレビによるキリスト教番組を視聴していると回答した者は、一人もいなかった、という点である。これは、今後のキリスト教テレビ放送の可能性と限界について、一つの重大な示唆を与えていると思われるのである。地域別の分析は、十分なデータがそろつてゐるわけではないので、ここでは第二一、二二項に対する総括的な見解を述べるに止めたいと思ふ。

一、日本人の聖書に接する機会は、日本人の文盲率が世界最低であるおかげで、他の異教国民に対して、はるかに恵まれた環境にあった、ということが出来るであろう。そして、日本聖書協会や、ギデオン協会などの強力な活動によって、聖書の配布率は高いパーセンテージを示しているのである。しかし、今後の日本における文化の形態が、大きくマス・コミュニケーションに左右され「読む文化」から「見る、聞く文化」へと移行することを考えるとき、ラジオ、テレビによるキリスト教伝道の新分野について、充分なる調査と研究が行なわれることが必要である。

二、キリスト教の集會に出席する可能性は、今後の日本の文化的様相や、教会での集會のもち方の現状を考えると、一層少なくなることが予想されねばならない。地方においては、この問題はより真刻になるであろう。また都市においても、集會が今までのように、一方的に、与える場としてとどまる限りは、現状以上に發展を期待することは無理であろう。交通、時間、労力などを考えた場合、従来のように頻繁に集會に出席させることに大きなウェイトを置いてきたことが、今後どの程度可能であるか、について、キリスト教会はもとより、他の宗教団体も研究しなければなるまい。

三、既に示した総計によってもわかるように、「みちのく」といわれてきた東北地方や、本州に海をへだてた「えぞの地」である北海道が、近代文化の中心である東京よりも、はるかにキリスト教との接触の機会が少ない、と今までのように断定することに、問題があるように思われる。たとえ東京都内に住んで、キリスト教会と同じブロックに起居していても、聖書はよまず、礼拝にも出席せず、またラジオやテレビ放送によるキリスト教の話にも接しようとしなければ、北海道、留萌の雪深くとざされた家で、ラジオによるキリスト教講話に耳をかたむける方が、はるかにキリスト教との触れあいはいは強いといわなければならぬ。すなわち、福音との触れあいは、地理的遠近の問題で

第21、22項 青森県在住者のキリスト教との触れ合いの媒体（恐山参拝者の中から）



第 13 表

はないのであって、「真理を求める心」の強さの問題なのである。

四、青森県在住者で、第二一、二三項に肯定的な回答を寄せた人は六五名いた。この人達のキリスト教との触れ合いの媒体として、聖書、集会、ラジオ、テレビのパーセントを調査してみると、右の第一三表のようになる。

おそらく、テレビ放送は、ラジオ放送以上に大きく発展することが予想されるが、その場合、先にものべたように、宗教放送、特にキリスト教放送が、どのような将来性をもつか、又、一般の人々によって、キリスト教放送が、どの程度歓迎されるか、などによって、日本におけるキリスト教の、一般庶民との接触の分野に、かなりの変動がおこる可能性があるのである。そしてこの問題は、直接伝道の問題、あるいは、伝道の目的といった大きな問題にも、深くかかわり合ってくるものなのである。

むすび

今回のレポートは、宗教調査の集計整理であったために、いたずらに数字が多くて、まとまりのないものに終わった。統計は、それをいろいろの角度から解釈することによって、興味のある仮設や見解を生み出すことが出来るものである。願わくは、本稿の読者諸氏が、以上に紹介したデータを参考にして、日本人の宗教性や、その他について、お考えいただければ、本稿の目的は半ば達せられるのである。

一昨年春、大学院で、三名の学生諸君と、日本人の宗教的意識について勉強を始めたのであったが、やがて、書物を通してではなく、われわれ自身が、日本人の祭礼に参加し、われわれの皮膚をもって、ぢかに感じとることによって学んでみたいと思うようになり、長駆みちのくの果まで旅することになった。炎天のもとに汗を流しながら終日を立ちつくし、堀立小屋の板の上に毛布一枚を敷いて一夜を過ごすなど、辛苦を俱にして作り上げたものが、これである。最後のまとめについては、まだ多くの点で、再確認の必要や、追跡調査の対象となっているものもあるが、それ

らは、すべて今後の研究にゆだねたい。言うなれば、これは中間報告的な性格のものなのである。

八四

注

- (1) 九学会連合下北調査委員会編「下北―自然・文化・社会」
平凡社、昭和四二年、の第二編、第五章「下北の宗教の」。「恐
山信仰」の項目で、恐山への参拝集団である恐山周辺の六二
の部落を調査対象とした統計が発表されている。二六三頁―
二七三頁参照。さらに同じデータが、楠正弘「下北の宗教」
未来社、一九六八年、八七頁―一〇二頁にも発表されている。
- (2) 小林栄「イタコと祭り」神学研究、第一七号、一八五頁
―一九〇頁参照。
- (3) 九学会連合下北調査委員会編「下北―自然・文化・社会」
平凡社、二六三頁―二七三頁。
- (4) 昨、昭和四五年七月の大祭がおわたのちに、団体参拝
者が恐山にくることになったが、普通の場合は、イタコは全
員下山してしまうのであるが、円通寺の方からイタコの世話
役の平田氏（鱈ヶ沢の平田アサの夫）に交渉があつて、団体
参拝者によるイタコの口寄せの希望に応じるために、イタコ
の中で残れる者は残ってほしいという依頼があつた。
- (5) 昨年八月七日に百石町の法運寺の七日盆を調査に行つた
が、イタコは南部イタコばかりが二三名集つていた。二日
間にわたるイタコの口寄せには、本堂にあふれるばかりの婦
人たちが集まり、常時二〇〇名を切ることはないと思われる
程の盛況であつた。現在でもイタコマチの最も俗化していな
いところであろう。
- (6) 毎日新聞の昭和四五年一月九日夕刊には、「母親がイ
タコ（祈とう師）のお告げを信じ、長男をなぐり殺す」と報
道されており、イタコ即祈とう師と言う印象を読者に与えて
いる。之は明らかに誤報である。週刊サイケイの昭和四六年
一月二五日号では、この事件を、「イタコ―人間の禁忌をえ
ぐる盲女群」の中で取りあげているが、通称「高山のバッチ
ャ」こと鈴木キク（八一才）は、カミサマであつて、イタコ
ではない、と言及しているのは正しい。この事件については
陸奥新報の昭和四五年一月一〇日（木）の記事「まだ根強い
神頼み」がやはり一番正確に報道している。